

令和元年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 加藤 実 日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野 准教授

研究要旨

医師診察では痛み対応が困難な慢性痛患者にしばしば遭遇する。痛み対応を困難にしている原因の一つに、医師だけの診察からは得られにくい情報がキーとなっている場合がある。今回は、看護師の診察では問題解決の糸口がみつからず、痛みの原因が分からず、対応に苦慮していた慢性痛患者に対して、集学的診察の中での看護師診察を契機に、心理社会的要因の情動因子が判明し、痛み対応の方向性を見出せ、治療を通じて失われた日常生活を取り戻すことができた症例について報告する。

A．研究目的

慢性痛患者に対して集学的多職種診察を通じて、複数の病院で治療抵抗性であった痛み並びに日常生活に支障を来していた患者に対して、痛みの原因の特定と治療の方向性を見出すことができ、治療により痛みの軽減と失われた日常生活の改善ができた症例について報告する。

B．研究方法

当院の多職種集学的痛みセンターでは、全ての新患者に対して看護師、薬剤師、精神科医、ペインクリニック医師が順次診察を行い、集学的に患者を評価し、個々の患者が抱えている問題点を明らかにし、問題点に対する対応と痛みの対応法についての情報を提供し、患者に痛みの原因や痛みのメカニズムについての理解と気づきを促し、原因に対応した具体的な痛み対応法を提示している。

看護師診察では、1)医療機関で話せてない情報収集、2)不安・認知の是正につながる情報収集、3)新たな気づきの促し、薬剤師の診察では、1)コンプライアンスの評価、2)アドヒアランスの評価、3)服薬した薬物療法の不

満・不信感の把握を、精神科診察では1)精神疾患の有無、2)性格把握につながる情報収集、3)メンタルサポートの必要性の有無を、そしてペイン医は、1)スタッフ診察を通じての新たな気づきの有無、2)痛みの詳細な問診と身体診察、3)痛みの種類と原因の説明、4)慢性痛のメカニズムと治療の目標設定、5)具体的な対応法と目標の提示を行っている。

今回は、慢性痛患者に対する集学的多職種診察の中で看護師診察を通じて、痛み並びに日常生活に支障を来していた患者が、痛みの対応法を見出すことができ、痛みの軽減と日常生活の改善が得られた患者を輕輕したので報告する。

（倫理面への配慮）

これらのデータ収集については、当院の臨床研究審査委員会にて審査を受け承諾を受けている。

C．研究結果

症例1 集学的診療が自閉症スペクトラム障害児の慢性腰痛に有効であった一症例
30歳代女性、主婦。10年間持続する右胸痛を主訴に集学的多職種痛みセンター紹介。生活・家族背景等について看護師診察の丁寧な聴取

で、完璧主義で真面目な性格、母や夫に見捨てられないよう気を使っていること、40か所の医療機関で見出せなかったトラウマ体験が明らかになり、かつ痛みで自分は死ぬという捉われに繋がっていたことが判明した。看護師は家族関係の真相を捉えるために母と面談を行い、患者は学童期に通学中に同級生の死体遭遇体験、数々の傷つき体験、不安・恐怖感が強く周囲を気にかけての成育歴の詳細が明らかになった。以上から痛みの訴えは身体的要因に加え、トラウマ体験に伴う強い不安と恐怖感の関与が疑われ、身体的対応に加えて、トラウマ体験に基づいた痛み対応をした結果、初診から2か月後に弱オピオイドの減量、痛みの軽減と日常生活の改善が得られ、10か月後更なる改善中である。

症例 2 痛みセンターの看護師診察により家族関係が痛みの増強因子の関連の気づきを促せた1症例

50代男性。職業：自営業。疼痛部位：腰痛、下肢痛、痺れ。初診時ぎっくり腰を契機に腰痛、下肢へ痛みの拡大を話し8施設を廻ったが原因不明なことを訴えた。看護師が慢性疼痛と社会的要因が増強因子となることも説明し、A氏へ情動的な言語化を促すと妻とは出産後不和となり3年にも及ぶ離婚、親権裁判があり現在は一人親として両親や姉の支援を受け子育て中だが痛みにより安静生活となり、長男として家業を高齢の父親が継続、子どもへ父親役割を十分果たせないなど社会的役割の揺らぎや予期的不安を吐露した。「痛みに囚われた生活で自分が何に不安だったのかを話して気持ちを整理できました」と安心した表情へ変化し、ペインクリニック医の診察では「筋筋膜性疼痛」と診断。認知行動療法、運動療法を指導。3ヵ月後受診では「周囲にも表情が変わって初診で4割の痛みが取れた」と話し症状緩和。痛みセンターの診療を継続して

いる。

D．考察

今回紹介した2症例も痛みの原因を見出すために時間を要した症例であり、このような患者さんは今後も少なからず想定される。

患児を中心に据えて、集学的に多職種で患児に関わることを通じて、それまで水面下に隠れていた事実、加えて痛みとは関係ないと思っていた事実が明らかにされ、これらに適切に対応することで、痛みの軽減と日常生活の改善に繋がった経験をした。

身体的要因のみに焦点を当てた痛み治療に抵抗性の場合は、集学的多職種診察チームの看護師診察の介入は、医師単独介入では明らかになりにくい心理社会的情報が得られる可能性、加えて適切な痛み対応法の選択に繋がる可能性が示唆された。

E．結論

医師診察だけでは問題解決の糸口がみつからず、痛みの原因の同定が困難で痛み対応に苦慮していた2症例の慢性痛患者に対して、集学的に多職種診察の看護師診察を契機に、痛みの原因あるいは患者自身が気づいていない痛みの修飾因子が判明し、痛み対応について患者に新たな気づきが生じ、患者の理解と納得が得られ、痛み対応の方向性を見出し、治療を通じて痛みの軽減と日常生活の改善を得ることができた。

F．健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G．研究発表

1. 論文発表

1) 加藤 実、松井美貴：慢性痛患者に対する集学的痛みセンターを中心とした地域医療連携 医師、メディカルスタッフの役割、ペイ

ンクリニック 40:437-447,2019

2) 上島健太郎、加藤 実：痛み診療における
薬剤師の役割、ペインクリニック 40:1053-
1062,2019

2.学会発表

1) 国内

・牛山実保子、坂田和佳子、加藤 実、集学的
痛みセンター看護師診察を契機に 学童期の
トラウマ体験が判明した慢性痛患者の一症例、
日本ペインクリニック学会第 53 回大会、熊本、
2019.7.19

・佐藤今子、加藤 実、痛みセンターの看護師
診察により家族関係が痛みの増強因子の関連
に気づきを促せた 1 症例、日本ペインクリ
ック学会第 53 回大会、熊本、2019.7.20

・鳥沢伸大、加藤 実、薬物療法と装具を用い
た作業療法の併用が奏功した母指粉瘤摘出術
後慢性痛患者の 1 症例、日本ペインクリ
ック学会第 53 回大会、熊本、2019.7.20

・加藤 実、神経障害性疼痛に対する強オピ
オイド、ワークショップ2 神経障害性疼痛に
対する薬物療法 - 何を選ぶか、日本ペインク
リニック学会第53回大会、熊本、2019.7.20

・加藤 実、慢性疼痛の評価と診断、シンポジ
ウム3 慢性疼痛の評価と治療の実際、日本ペ
インクリニック学会第53回大会、熊本、
2019.7.20

H .知的財産権の出願・登録状況(予定を含む)

1.特許取得

該当なし

2.実用新案登録

該当なし

3.その他

該当なし